

Title	明治・近代女子教育覚え書き：さまざまな女子教育機関の誕生
Sub Title	Note of women's education at modern Meiji
Author	小山, 彰子(Koyama, Akiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.112 (2004. 3) ,p.131- 163
JaLC DOI	
Abstract	This is a small note about the history of Women's education which started off at Meiji era. The progress of Japanese modern education, both for men and women, owe much to western culture. The First big wave of Western culture were carried by several Missionary societies. They are Protestant Missions. They started to build schools for girls and the first Missionary school in Tokyo was built at 1870. From then the Missionary society spread out throughout Japan. On the other hand, Catholic convent started their work in Japan for public good. They were defeated on the first stage of expansion of the school establishment. After mid-Meiji Catholic convent changed their strategy for survive in this newly developed country. This note tried to describe the process of how these Christian missionaries or convents settled their schools under "the rushing wind and gale" age.
Notes	特集家族とその社会的・生活世界の探求 研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000112-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

明治・近代女子教育覚え書き

—さまざまな女子教育機関の誕生—

小 山 彰 子*

Note of Women's education at Modern Meiji

Akiko Oura Koyama

This is a small note about the history of Women's education which started off at Meiji era.

The progress of Japanese modern education, both for men and women, owe much to western culture.

The First big wave of Western culture were carried by several Missionary societies.

They are Protestant Missions.

They started to build schools for girls and the first Missionary school in Tokyo was built at 1870.

From then the Missionary society spread out throughout Japan.

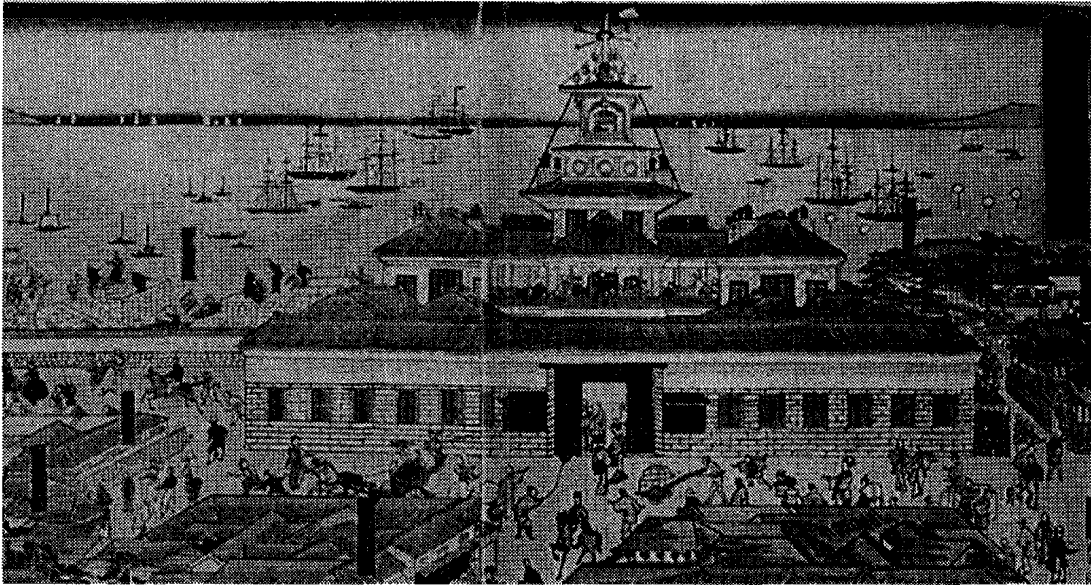
On the other hand, Catholic convent started their work in Japan for public good.

They were defeated on the first stage of expansion of the school establishment.

After mid-Meiji Catholic convent changed their strategy for survive in this newly developed country.

This note tried to describe the process of how these Christian missionaries or convents settled their schools under "the rushing wind and gale" age.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（社会学）



(都史紀要 4 より東京築地鉄砲洲景)

はじめに

近代女子教育は、まずプロテスタント系伝道会社経営の女学校・女塾に牽引され、次いで女子師範系にみられる府県立の女学校が全国に設置され、社会事業から始まったカトリック女子修道院経営の女学校は、主に上流階級の子女を教育する役割を担うようになった。

また、宗教に依らず、日本独自の良妻賢母思想に基づいた私立の女塾も創設された。

それぞれの特色は、プロテスタント系学校が男女の平等、婦人解放の意識を芽生えさせ、社会運動の基盤を作っていたことに対し、府県立の女学校は国家の流れに沿うように発展し、まず女教師を要請し、やがて国民国家の母を生産する場となっていく。

カトリック系女学校は「……地味で上品な日本婦人を教育する」(サン・モール会)、「……妻として母として完全なる女性になるために徳育を女子教育の第一とし……」(聖パウロ会)と謳い、1890年(明治23年)以降は、日本政府の方針に従ってカトリックの布教より高等女学校におけ

る普通教育の普及に貢献した。

それぞれが礎を築いた教育施設は、時代の変遷の中で消えていったり、合併されたりしたものもあるが、多くは現在まで、時代の変化を受け入れながら、今尚、女子教育機関として我が国の女子教育を担っている。

本稿では、我が国が近代の産声をあげ、手探りで近代化を推進し始めた明治期の女子教育、なかでも専門技術教育（医学、美術など）を除くほんの一端にすぎないが、女子教育創生期の歴史を確認する意味でまとめた。

先行研究について

これまでの女子教育に関する先行研究は膨大な数に及ぶが、高等女学校令公布以前の女子教育、とりわけ学校発行の年史に基づき、キリスト教系学校の階層性に焦点を当てた研究に及んだ文献はまだ無い。

もともと年史はその学校関係者、出身者を対象に発行される閉鎖性の強い性質を持つことから入手の困難さが一因と考えられる。

また、カトリック系、プロテスタント系に拘わらず、キリスト教の教義と階層性は矛盾を内包する問題であることも大きな要因である。

今回、女子教育創生期の姿を描くため、各教育機関のご厚意で貴重な記念誌・関係資料をご提供頂いたので、それらに基づき整理していくことにする。

「女子教育」について

現在では、殊更「女子の」教育と限定的に捉える向きも少ない時代であるが、女子に対する教育の必要性が顕在的な動きとなって現れるのは、ほんの130年ほど前のことであり、法制度が整備され、広く国民に浸透していくのは、それから更に時間を要すことであった。

「明治の初年に、女学校が出来たことは、雨後の筍といひますか、明治の三年から同十年へかけて官立私立が諸方に創設されたものです、勿論欧米の例に倣ひ、女子教育の俄仕立、女大学から女子を解放して、欧米の如く女権の拡張をやろうといふ、政府の洋酔主義が見え透いてゐますが、これが為めに日本の文化も、一躍して進展し、欧米の真似は出来たものといはなければなりませんまい。女子を教育しなかったら、文明開花は因循姑息でどうなつてゐたものやら、女学校も耶蘇方面の誘導が多く、私立は大抵宗教の女学校がおおかつたものです。……略」（篠田鉦造著；明治百話より女学校の嚆矢 M. 6）

上記の抜粋は、明治の東京の様子を、新聞記者による「聞き書き」としてまとめた「明治百話」に収められているが、その頃の女子教育についても触れ、当時の世相をよく現して興味深い。

ところで、「女子教育」という言葉は、現在では、広く女子一般に対する教育をイメージさせるが、教育史の分野では、教育制度上男子の「中等教育以上の教育」と区別する意味合いで女子の中等教育以上の教育、現実的には、「高等女学校以上」の女子に対する教育を指して使用されることが多かった。^(注1)

しかしながら、高等女学校令が公布されるのは明治も後半の 1899 年（明治 32 年）のことであるから、それ以前の女子の教育については表す適当な言葉が無いことになる。

既に 1870 年（明治 3 年）には東京府下 6 校の小学校が設置され、1872 年（明治 5 年）には学制（太政官告示第 214 号）が制定されており、近代における女子の教育は、ささやかではあったが、その第一歩を踏み出していたといえる。

国民皆学を目指した学制において、女子については、「女兒小学」として初めて言及されたが、これは、「尋常小学教科および手芸の教授を教えることを規定したもの」（日本近代教育史事典 P419）であるから、高等女学校水準の女子教育とは程遠いが、女子への教育の歴史が浅い分、体系的にも初等教育から始まったのはいわば当然のことである。

従って、本稿で使用する「女子教育」の意味としては、高等女学校以上の女子教育に限定せず、現実的な意味から前者、すなわち広く女子の教育を指すことにする。

都史紀要に見る女子教育機関の設立

明治に始まる近代の教育、特に女子の教育に焦点を当てて考える際、我々は幾つかの特色ある方向を見いだすことができる。

都史紀要9『東京の女子教育』においては、1870年（明治3年）から1889年（明治22年）までの東京の女子教育施設成立の経過を、主として開学願や私立学校明細調などの資料に基づいてまとめているが、これによると、当時の女子教育施設は、1. 一般の女子教育施設、2. プロテスタント系の女子教育施設、3. カトリック系の女子教育施設、4. 仏教系の女子教育施設、5. 手芸・裁縫を主とする女子教育施設、に分類されて記載されている。（＊明治3-17年までは上記のような分類ではなく、申請順に記載されている。）

しかし、その後の女子教育史を考えていく上で、一般の女子教育施設は更に2つに分類することが可能と考える。

すなわち官公立の女子教育機関および私立の非宗教系女子教育機関という分類である。

官公立の女子教育機関としては、国立の女学校が1872年（明治5年）東京女学校（明治10年廃校）として最初に創設され、1874年（明治7年）の東京女子師範学校設立以降、国家の教育理念に基づいて、全国に順次設立されていった。

地方で最初の公立の女子教育施設は1872年（明治5年）京都府立女学校で、明治13年6月の文部省調査における府県立女子学校表によると、設立が17校、そのうち13校が師範科、4校が京都府立の英語科・中学科、栃木の中学科、静岡の高等小学科・模範科、岐阜の女学科である。

私立の非宗教系女子教育機関としては、1875年（明治8年）跡見花蹊の創設による跡見学校や、1881年（明治14年）下田歌子創設の桃夭女塾（一時廃校）のちの実践女学校、1887年（明治20年）翠松学舎のちの三輪田女学校などがこの分類に入ると考えられる。

これらの学校は、現在まで続く歴史を持つ学校であるが、特に桃夭女塾は、賢母良妻を育成する事を旨とし、その後の女子教育思想に大きく影響を与えている。^(注2)

ところで、先の抜粋にもあるように、我が国の女子教育はキリスト教との関係（…耶蘇方面の誘導が多く…）が深かった。

特に、初期にはアメリカ、プロテスタント系キリスト教伝道会社に負うところが大きい。

明治以前の我が国の歴史を考え合わせると、キリスト教系の学校の創設は、我が国の近代の特徴の一つと言わねばなるまい。

明治10年までの主だったものだけでも挙げてみると、1870年（明治3年）Ms＝ギダーの学校のちのフェリス女学院（横浜）、A6番女学校のちの女子学院（東京）、1871年（明治3年）アメリカン・ミッション・ホームのちの横浜共立学園（横浜）、1873年（明治6年）B6番女学校のちの女子学院（東京）、1875年（明治8年）照暗女学校のちの平安女学院（大阪のち京都）、神戸英和女学校のちの神戸女学院（神戸）、1876年（明治9年）同志社女学校（京都）1877年（明治10年）立教女学校（東京）などである。

これらは全てプロテスタント系キリスト教の、ミッション・スクールと呼ばれる、キリスト教伝道会社が資本を出し、開設した学校である。

キリスト教の思想を取り入れて開学した学校でも、ミッションを持たない学校が存在するが、その最初の学校は1876年（明治9年）成樹学校として開業願が出された、のちの原女学校であり、こうした区別は厳密には必要であろう。

それでは、何故こうしたプロテスタント系キリスト教伝道会社が我が国の女子教育に先鞭をつける形になったのであろうか。

五野井隆史の指摘にもあるとおり、当時のプロテスタント支持者層は、士族層、とりわけ旧幕臣や旧佐幕派の出身者であり、彼らが「立身出世のため宣教師に接近して洋学・英学を学ぶうちに、その人格に強く感化を受けたため」（五野井、P. 268, 2001）である。

同様の指摘が、隅谷三喜男にも見られる。^(注3)

五野井の下記引用にもあるとおり（前掲、五野井、P. 269）

カトリック教師ハ常ニ田夫野郎ノミニ親近スルユエ、彼ガ人爲リ極メテ僣シ、プロテスタントニ至リテは多ク中人以上ヲ目的トシテ誘引スレバ教師亦自ラ君子ノ風アリ（小沢三郎『幕末明治耶蘇教史研究』3・35頁）

プロテスタント各派は上中層知識層を対象としていた。

また、プロテスタントの宣教師達は、キリスト教を文明開化を促すものとしてキリスト教の布教につとめ、「日本人の邪宗観を払拭するため、天主教（切支丹）を攻撃し、自らを耶蘇教と称してカトリックと区別した」（前掲、五野井、P. 270）とある。

このような社会状況がプロテスタント系伝道会社による学校創設を受容する背景になったと考えられる。

カトリック系キリスト教については1872年（明治5年）まで学校の開設はない。

本稿では、主としてキリスト教学校を中心に、我が国の女子教育創生期の姿を描いてみたいと思う。

明治期は、我が国の「疾風怒濤」の時代であった。

国内の政治、教育などあらゆる整備は勿論のこと、国際社会の一員としての地位も築くべく邁進しなければならなかった。

教育制度一つ取ってみても、たびたび改正が加えられ、思想面でも統制

は厳しかった。

そのような中、キリスト教系学校はどのように発展していったのかを整理してみた。

尚、紙幅の関係で本稿で対象とする時代は明治期に留めることにした。

幕末から明治前期のキリスト教—プロテスタント系キリスト教の来日

我が国において、キリスト教とはおそらく近代以前はカトリック系キリスト教を意味していたと思われる。

キリスト教が我が国に初めてもたらされたのは、周知の通り安土桃山時代であるが、1549年（天文18年）フランシスコ＝ザビエルが、島津貴久の許可を得て布教を始めたのを我が国におけるキリスト教伝来としている。

織田信長、豊臣秀吉の治世下にカトリックの布教は一時活発に、そしてやがて迫害へと向かっていったが、封建思想と相容れるはずのないキリスト教は、我が国において常に西洋の文物、交易と結びついていた。

江戸幕府の政治機構が確立し、安定に向かった時代にあっては、思想統制は交易の魅力より重要であり、1612年（慶長17年）全国キリスト教禁止令を定めた。

更に、交易もイスパニア、ポルトガルという旧教国からイギリス、オランダという新教国が取って代わり、商館を平戸（のちに出島）に開設する。

後者2国は、布教よりもっぱら貿易を重視し、布教にさほど積極的でなかったことが幕府にとって優位に働いた。

イギリスは経営不振のために平戸の商館を1623年（元和9年）に閉鎖するが、かくして幕府の鎖国体制が完成することになる。

さて、我が国で本格的に再びキリスト教との関係が生まれるのは、幕末天保期以降である。

西欧諸国の産業革命の進展と、資源・貿易販路を求めた東方政策によって、我が国にも、開国を要求する国々が来航するようになり、まず、ロシアが1792年（寛政4年）ラクスマンを根室に派遣し、次いで、1804年（文化元年）レザノフを長崎に派遣した。

イギリスは、1808年（文化5年）フェートン号がオランダ国旗を掲げて長崎に来航し、オランダ商館を脅かすフェートン号事件を引き起こした。

1818年（文政元年）には浦賀に入港し、通商を求めたがそれに対し、幕府は1825年（文政8年）無二念打払い令を決めている。

アメリカは1837年（天保8年）から度々交渉を求めたが、ついに、1854年（安政元年）ペリーとの間に幕府は、日米和親条約12箇条を締結、下田、函館2港の開港など取り決めた。

ロシアとも同年、下田、函館、長崎の3港の開港を約した日露和親条約を結び、イギリスに長崎、函館の2港、オランダとも1855年（安政2年）同様の条約を結んだ。

そして、時の大老井伊直弼によって1858年（安政5年）日米修好通商条約が締結され、下田、函館、神奈川、長崎、新潟、兵庫を開港し、神奈川開港半年後、下田を閉じ、大阪、江戸を開市する事などが取り決められた。

フランスはそれより10年ほど早く、1844年（弘化元年）琉球中山府に貿易通商条約を求め、島津藩は、幕府に黙認を求め、ペリー以前に条約締結に成功している。

鎖国を始めた徳川幕府初頭と異なり、当時の幕府には諸外国に対しても、反幕府勢力に対しても圧迫を加える力はもはや残ってはいなかったと言える。

修好通商条約の信教自由は以下のように保証されている。

日本国仏蘭西国修好通商条約（安政5年）第4条

日本に在る仏蘭西人自国の宗旨を勝手に信仰し其居留の場所へ宮社を建てるも妨なし日本に於て踏絵の仕来は既に廃せり
（条約締結11カ国に対し、同様の項目を認めたが、実際居留地に宣教師を派遣したり礼拝堂を建てたのは米、英、露、仏の4国のみだった）（横浜雙葉学園80周年記念誌P.23）

開港した港には、条約の締結国の外国人を一定地域に限り、居住・営業を許可した居留地が設けられた。

この居留地を基盤に、宣教者たちの活動が始まったのである。^{（注4）}

1859年（安政5年）には、既に最初のプロテスタント系キリスト教伝道会社が来日している。

監督派教会（American Episcopal Mission）は長崎から大阪へ北上し照暗女学校、東京で立教女学校を開いた。

長老派教会（American Presbyterian Mission）はB6番女学校のちの女子学院の母体を開いた。

オランダ改革派教会（Dutch Reformed Church Mission）はヘボン塾（ただし、ヘボン自身はアメリカ長老派）のちにMs.ギダーの学校の母体であり、のちにフェリス女学院へ発展する。

1868年（明治元年）来日の会衆派教会（American Board Mission）は神戸英和女学校（神戸）、同志社女学校（京都）を創設した。

1871年（明治4年）合同伝道会社（The Woman's Union Missionary Society of America of Hearthern Lands）が American Mission Home を設立し、寄宿舎を持つ日本婦女英学校のちの横浜共立学園を創設した。

1873年（明治6年）来日のメソジスト派（American Methodist Episcopal Mission）は青山女学院の前身である海岸女学校を1874年（明治7年）創設している。

このように続々と来日するプロテスタント系ミッションの中で、女子の

みの教育機関ではないが、1863年（文久3年）10月、前述のヘボン夫妻が横浜居留地に男女共学の英学塾を開いた時点が、実質的な近代女子教育発祥と考えて良いだろう。

ヘボン（J=Hepburn, 1815-1911）は「ヘボン式ローマ字」で有名であると同時に、宣教師・外科医として来日し、1859年（安政6年）から実に33年間日本に滞在し、我が国の西洋化に大きく貢献している。

1867年（慶応3年）には、当時我が国では出版が許されていなかったもので、2万語にも及ぶ、和英、英和字典「和英語林集成」を上海にて刊行し、1880年（明治13年）4月には新約聖書、1887年（明治20年）10月には旧約聖書を翻訳出版し、この2冊は昭和28年日本人だけで作成した聖書が出版されるまで、我が国唯一の翻訳の聖書としての地位にあった。

ヘボンは日本への布教伝道以前に中国伝道を試み、1840年（天保11年）ボストンを出発しているが、1845年（弘化2年）に帰国し、1859年（安政6年）の来日まで、ニューヨークにて開業医として経済的にも相当な成功を収めている。（『ドクトル・ヘボン』P.88）

このように成功した資金を元手に我が国での伝道生活が開始されたが、横浜成仏寺を居住地と定め、当初は日本語研究、施療事業を行い、医院は盛況を極めたという。

英学塾は夫人であるクララが中心となって運営していたが、門下生には、幕府の高官、旗本、佐幕派の子弟などが集い、兵学の大村益二郎（適塾にも学ぶ）、後に首相となった高橋是清、外相となり岩倉使節団に随行する林董などがいる。

しかし、このヘボン塾が本格的な女子教育施設として発展していくのは、1869年（明治2年）伝道本部より新潟における伝道目的で派遣されたキダー女史が、翌年横浜へ移り、同年1870年（明治3年）9月よりヘボン塾で教師として働くようになってからのことである。

同時期、横浜に教授所を開いたアメリカン・ミッション・ホームと異なり^(注5)、ギダー女史の教育は、「むしろ我國のキリスト教女子教育の文化向上を目標としたので、比較的中産階級の上層部に共鳴者を見出した」(前掲、『ドクトル・ヘボン』P. 332)のであった。

キダー女史は、その後、ヒューマニストであり、神奈川県副県令にあった大江卓や神奈川県庁の支援を受け、1874年(明治8年)、基督教解禁から2年目の6月、山手178番地に「フェリス・セミナリー」を創設した。

ちなみに、ヘボン塾は後年、現在の東京白金の明治学院へ発展していき、ヘボンは、その初代学長を務めた。

こうしたプロテスタント系伝道会社を基盤とした女子教育機関は、来日当初は今だ禁教下にあり、布教をすることは困難であったので、英語教育、音楽教育などを通してキリスト教を基盤とした西洋の人間観を伝え、女性の地位向上に意識を導き、自立の精神を目覚めさせることに貢献した。

それはその後、女性解放、廃娼、婦人矯風会などの社会運動への取り組みへと女性を向かわせる強い精神的支柱ともなったのである。

カトリック＝日本再布教の時代

一方、カトリック系キリスト教は、幕末から明治初期は「再布教の時代」と呼ばれている。

山辺美津香の整理によると、カトリック再布教は明治末年までパリ外国宣教会に委ねられていた。

それは、①極東におけるポルトガル管区イエズス会の布教が、17世紀末以来、フランス管区イエズス会に移行したこと、②パリ外国宣教師会が東洋布教に成果をあげていたこと、③ローマ教皇庁布教聖省がパリ外国宣教師会に日本教会再建を命じていたことなどが考えられるという。

日本開国後最初の日本教区長ジラル (Prudence-Seraphin-Barthelemy Girard 1821-1867) は、フランス総領事館付き司祭兼通訳という名目で、1859年(安政6年)横浜へ入港した。

その後、1865年(慶応元年)フューレ (Louis-Theodore Furet 1816-1900)、プティジャン (Bernard-Thadee Petitjean 1829-1884) は、長崎大浦天主堂を建立し、同年、「浦上で信徒を発見」するに至った。

しかし、キリスト教弾圧は依然として厳しく、1867年(慶応3年)浦上信徒68名が捕縛され、(浦上4番崩れ)、翌、1868年(明治元年)政府は五榜の立札を全国に掲示し、キリシタンを禁じた。

それに対し、プティジャンはフランス公使ロッシュ (Leon Roches 1809-1901) を通じ、キリシタン禁制高札廃止を訴えたが、浦上キリシタン中、114名が配流された。

結局、1873年(明治6年)のキリシタン禁制高札撤去まで、カトリック系キリスト教は、信徒の保護、帰正を主眼とした活動を主軸とし、我が国の近代化に関わるような教育活動に目立った動きはない。

1873年(明治6年)の年末の信徒数は約15,000、そのうち9割が長崎の信者で、残りは函館、横浜、神戸などの居留地にいたらしいと言われている。

山辺の分析に寄れば、明治初期のカトリックは、中央の新時代の指導層への働きかけをする余裕は少なく、迫害にさらされる浦上信徒の問題や、潜伏キリシタンの再教育などを含め、教会の目は長崎に向けられていた。(山辺, 2003)

とは言え、我が国への布教を早急の課題と考えていた、プティジャン司教は、1862年(文久2年)「ニコラ=バレ (Nicolas Barre, 1621-1686) の幼きイエズスの修道会」、または「サン・モール (Saint Maur) 修道会」(雙葉学園の前身) と呼ばれる、フランス系修道会のシンガポール修道院長メール=マチルド (Mere Sainte Mathild 1814-1912) に宛て、「切支丹

禁制の解かれる希望が見えてきた。今すぐ宣教女にきてもらいたい。」（横浜雙葉学園 80 年記念誌，P. 21）という手紙を出している。

この時点から、我が国の女子教育とカトリック系キリスト教に接点が結ばれるのである。

本稿では、これ以降、サン・モール会の我が国における歩みを中心に、同じフランス系修道院のシャルトル聖パウロ会の資料などで補足しつつ、カトリック系女子教育機関の足跡を辿りたい。

サン＝モール修道会について少し詳しくその起源を述べておきたい。

カトリック系修道院で最初に来日したのは、このサン・モール会であったが、早くから教育事業に着手したプロテスタント系伝道会社と異なり、カトリック女子修道院が我が国において最初に着手した仕事は社会事業であった。

サン・モール会の 5 名の修道女が横浜に到着したのは、1872 年（明治 5 年）であるから時期的にさほど遅い来日とは言えないが、女子教育への早期着手を願いながら、修道会にとって、社会事業は眼前に差し迫った課題であった。

当時は、孤児、捨て子、困窮者の子どもたちが市中にあふれており、プティジャン司教はこれら救済事業を修道会に委ねることを考え、修道女の来日を期待する動機にもこうした孤児救済の目的があった。

このサン・モール修道会は正式名 (Maitresse Charitable du Saint Enfant Jesus) と言い、当時本院の所在地がパリ、サン・モール街であったことから通称されるようになった。

起源は 1662 年まで遡り、北フランス、ルアンのミニム修道院の神父、ニコラ＝バレがルアン近郊のソットビルという村に開いた学校が発祥である。

当初から、一般庶民の子女、特に貧しい家庭の子どもたちに教育を授けることが、修道会の主な事業目的であった。

ニコラ=バレは無月謝の学校である慈善学校を展開し、その運営者である修道会を継続していくため、若い女性たちを修道女として教育していく必要から、「セミネール」と呼ばれる修道女養成所をルアンに設立し、修道女教師の養成にも尽力した。

この「セミネール」は、プロテスタントで言うところの「セミナリー」に近い意味合いと思われる。

「バレー神父の学校」はやがてパリ、サン・モール街にも「セミネール」を開くことになり、時のフランス王ルイ 14 世と王妃マントノン夫人は、戦争によって貧困に陥った貴族の令嬢たちの教育機関サン・シール貴族女学校設立に際し、ニコラ=バレの修道女たち 12 名を教師として修道会から借り受けるほどに発展した。

教科は読書、習字、文法、算術、歴史、地理、工芸、実務（応対、清掃、裁縫、手芸）であったという。

横浜雙葉学園 80 年史によると、

また、当時の記録によると、サン・シール学校の生徒は高貴な家柄の子女であるが、質素な風姿で、温雅と共に堅実、家庭に須要な裁縫に長じており、依頼心を去って独立心を持つ生活をし、道德生活は殆ど完全に近く、礼儀は特に具体的に、実際に懇切に指導をうけ、もってサン・モール会の修道精神が教育に反映したと見るべきであろう。（前掲、P. 20）

と記されている。

このように規模を拡大していった修道会も、1789 年のフランス革命時に大いに打撃を受け、修道会は解散、修道会の財産没収という苦難が、ナポレオンのフランス統一まで続いた。

サン・モール修道会は、創立当初より、教会法的にはフランス大司教の認可のもとにあったが、総長メール・ドゥ・フォドアス (Mere Saint Francois de Faudas) 在任中 (1837-77) 教皇庁直属の修道院となった。

そして、国外宣教の機運が高まる中、1851年のマレーへの派遣を皮切りに、ペナン、シンガポール・マラッカに修道院、孤児院を設立し、ついに1872年（明治5年）、先のプティジャン代牧司教の依頼を受けてメル・マチルドが布教のために来日したのであった。

1859年（安政5年）、日仏通商修好条約が幕府との間に調印されて以来、パリ外国宣教会の神父たちは、函館、横浜、長崎の外国人居留地に住む外国人への宣教のため我が国に入ってきていたが、日本人に対する布教は厳しく禁じられており、1868年（明治元年）においても、禁教政策はそのまま「切支丹宗門の儀は是まで御禁制の通り固く相守るべきこと」（五榜の立札）とされたままであった。

1871年（明治4年）欧米に安政の条約改正、海外の諸制度視察に派遣された岩倉具視一行らは、日本のキリスト教徒迫害を各国で激しく非難され、その早期解決を痛感したといわれている。^{（注6）}

各国の厳しい非難を受けて、1873年（明治6年）太政官布告68号という形で、キリシタン禁制の高札撤去が発令されたが、「高札の面の儀は一般に熟知の事に付き向後取除き申すべき事」と示され、消極的撤去と伺える。

このような時期に修道女たちは来日したわけであるが、修道会は、横浜での事業に加えて、東京への進出も時を移さず進め、二つの事業を手がけた。

一つは、居留地に住む外国人の比較的良家の子女たちの教育で有料とし、もう一つは、日本人孤児、生活困窮者のこどもたちの教育を目的とした無料の施設であった。（神奈川県教育史）

後者の横浜の施設は「仁慈堂」のち「董女学校」と呼ばれ、山手83番地に横浜で最初の孤児院が設立された。

施設拡大のために土地の拡張を望んでいた修道院に対し、プロテスタント系学校フェリス女学院の前身、Ms. ギダーの学校設立にも尽力した、時

の神奈川県令大江卓は、この時も山手 83 番地内隣接地約 1,000 坪の土地貸与を認めている。

来日以来、孤児救済社会事業を活動の中心に据えてきたサン・モール修道会が、救済事業から本格的な女子教育事業に移行するのは、明治 30 年ころからであるが、それ以前の明治 20 年頃から、修道会には深刻な悩みが生じることになる。

それは、次章で言及する社会事業と女子教育の両立に関する悩みである。

サン・モール修道会に遅れること 5 年、1878 年（明治 11 年）にシャルトル聖パウロ会の修道女 3 名が函館に降り立った。

依頼は北代牧区長オズーフ (Pierre-Marie Osouf 1829-1906) 司教で、目的は先のサン・モール会と同じく女子教育と社会事業であった。

函館では孤児院、授産所、薬局を持つ施療院を開き、「ガンガン寺の膏薬」として販売し、その代金は修道院の費用を賄う大きな力となった。

1886 年（明治 19 年）に私立聖保禄女学校が生徒 25 名で開校され、現在の函館白百合学園の前身となった。

聖パウロ会が東京に進出するのは、1881 年（明治 14 年）であるが、都史紀要には、1889 年（明治 22 年）、女子仏英学校の設立願として掲載されている。

それ以前の様子について、『白百合学園 100 周年記念誌』に以下のように記されている。

……略……さらに、明治 10 年代の欧化熱の影響もあって、外国語教育の重要性を感じていた知識階級には、フランス人の童貞のもとで子女を勉強させたいと望むものが多く、童貞女学校（筆者注：2 年後女子仏英学校と改称）も、開学の初めから教場が不足し、すべての志願者を迎え入れることができなかったという。……略……（前掲、P. 23）

この童貞女学校の開学願書は提出されておらず、その理由を都史紀要には社会事業が主体であったためと推察している。

明治 22 年の設立願には、設立目的を

本校ハ甲科乙科ノ二科ヲ置ク甲科ハ仏学科若クハ英学科及ヒ日本裁縫科音楽科図画科トシ乙科ハ西洋裁縫科目刺繍科造花科玩具科ノ四科トス（前掲，P. 28）

としている。

課程表を詳しく見ていくと、甲科はフランス語、英語、和漢学、など語学を重視した普通教育に近いが、乙科の玩具科は、児童の襟巻き小物の編み物、西洋裁縫は、手袋、靴下、シャツなどの製作、刺繍科はハンケチ他装飾物、造花科は種々の造花を製作するようになっており、いわゆる、技芸を教えている。

救済事業と女子教育の葛藤

困窮者の子弟の養育と、一般の子女の教育とを併行して行うのは日本では相当に難しい仕事であつたらしい。

明治 20 年当時プロテスタント系女学校は女子教育への着手が早かっただけに、充実期に入っていた。

一方、救済事業を中心に進めてきた修道会の仕事は、実は修道会自体が期待する程には成果を上げていなかったようである。

東南アジアでの社会事業と異なり、修道会で引き取った孤児をキリスト者として育て上げることが、日本では困難だったのである。

さらに、救済事業に必要な費用は高額であるばかりでなく、その費用に充てられる有料の教育事業に、一般の日本人の父母たちは子女を預ける事への躊躇があつた。

プロテスタント系女学校が、活発に教育事業を展開する傍らで、カトリック司教座のオズーフ司教は、サン・モール修道会パリ本部に宛てて、

女子教育，それも上層階層をターゲットにした教育展開の必要性を書き送っている。^(注7)

教育史家の渋川久子氏も，

「貧しい人やよるべのない人の必要をみだし，真先に救われなければならない憐れな人々を助ける」ことは，意義のある大切な仕事に相違ないのだが，そういう人々が傍にいるために，サン・モール修道会の寄宿学校に子どもを託するのを躊躇する家庭も決して少なくなかった。良家の子女を教育し，子どもたちを通してよく教育された日本の上流や富裕の階層にも宗教が理解され，うけいれられてゆくことはやはり意義のある大切なことなのである。（信仰と教育と サン・モール修道会 東京百年の歩み P. 40）

と，綴っている。

同様の記載は、『雙葉学園 80 年の歩み』(P. 38) にもみられる。

こうした経緯ののち，1887 年（明治 20 年）麴町区 6 番地に仏語女学校（半年で移転）半年後，築地明石町に戻り高等仏和女学校と変遷しつつ本格的な女子教育に着手はしたものの，

……略，この新しい教育事業も決して成功とは言えないものだった。マダム・セン・フランソワ・ド・サールによれば，日本の上流層を対象とし，特に，「貴婦人のために特別語学科」まで設置したにもかかわらず，「華族たちは，家庭に留まり，ごく少数のものが，修道女の個人的なお稽古に出かけてくるだけ」であった……略（信仰と教育と P. 84）

と述べられている。

社会事業との両立に苦しんだ修道会は，一般の女子語学校の出入り口と孤児院とは出来るだけ切り離す工夫などを試みたが，(Fp37)，結局 1908 年（明治 41 年）雙葉高等女学校設立，麴町への移転に伴い，孤児達は，横浜の董小学校（サン・モール修道会経営の施設）に移っていった。

一方，聖パウロ会はどうであったのだろうか。

記念誌には，1891 年（明治 24 年）修院兼校長の言として，

「孤児院では、10才から18才までのこども110人が共同生活を送っており、20人近くの乳児が姉妹たちの手で養育されている。……略…寄宿舍には国際色も豊かに、仏、英、伊、独の男女のこどもや混血児、日本人の子女たち30人を収容している。……略」（白百合学園百周年記念誌 P.35）

とある。

年表を繰ってみると、1896年（明治29年）当時、小学校170名、高等仏英学校48名（うち43名寄宿生）孤児院に162名、授産所に40名収容とあり、1912年（明治45年・大正元年）東京麻布に新しい孤児院開設の記録がある。

それ以降孤児院についての記載がないが、少なくとも明治末年までは分離せず、社会事業も並行して行われていたものと考えられる。

宗教教育と学校経営

1890年（明治23年）教育勅語が發布された。

これは、儒教的道德思想に基づき家族国家観に立った天皇制強化をはかるものであったが、そのためカトリック、プロテスタントに関わらず、キリスト教は大きな打撃を受けた。

プロテスタント系学校には、生徒が集まらず、閉校を余儀なくされた施設もある。

これ以降、キリスト教系学校は、政府の教育政策、とりわけ宗教教育への否定的施策とどのように折り合っていくかが組織存続の重要課題の一つとなっていく。

そうした社会状況とも相まって、サン・モール会は雙葉会創設に向けて動き出し、居留地を出て貴族や上流夫人たちに英語やフランス語を教える組織を設立することに至った。

赤坂葵町（のちに麴町）に語学稽古所雙葉会を創設した。

1897年（明治30年）帝国大学教授長井長義が校長、鍋島侯爵夫人、

西郷侯爵夫人、前田公爵夫人、戸田伯爵夫人、田中子爵夫人、香川子爵夫人、青木子爵夫人が後援者となって開設された。

会名「雙葉」については、

日本の上流社会の夫人および令嬢達が、外国語の勉強が便宜にできるようにと考え後援者である夫人方の協賛を得て、私達は「雙葉会」という名称のもとにクラスを設けました。そのクラスでは日本の令嬢たちが、フランス語、英語を学び、ヨーロッパの礼法を学ぶことができます。葵というのは小さな植物で、真直ぐに伸びた茎の先に二枚の葉をつけます。それは日本人にとって友情のしるしなのです。この校章は、この学校がヨーロッパの女性と日本の女性と、勉学と会話を通して友情を結び、一致する場であることをあらわしています。東京サン・モール会所蔵 訳島田恒子氏（横浜雙葉学園 80 周年記念誌 P. 33）

時間割は、華族女学校、女子高等師範の生徒たちも受け入れられるように工夫がなされ、初期の学則にもその旨が明記されている。（資料図 2）

このように、明治 30 年頃からは、サン・モール会は、来日当初の救済・社会事業から女子教育、特に我が国の上流階級の子女を対象とした女子教育機関へと転換していった。

そして、教育勅語から 10 年、1899 年（明治 32 年）政府は高等女学校令を公布すると同時に、宗教上の儀式・教育を行うことを禁じる訓令、いわゆる教育宗教分離令を出し、そのことによってキリスト教系学校は更なる決断を迫られることになった。

生徒数も僅かで、国内の普通教育も今だ最初の一步を進み始めたばかりであった明治初年と異なり、明治もこの時期になると、多方面で近代化が進められ、とりわけ女子教育の分野では高等普通教育が期待された。

宗教教育を残し各種学校のままでいるか、宗教教育を行わず、高等女学校としての体制を確立するかは、宗教を基盤として設立された学校としては並々ならぬ決断を強いられたといつてよい。

雙葉学園 80 年史によると、当時校長であったメール・セン・テレーズ

(Mere Saint Therese 1870-1940) は女子高等師範学校長の高嶺秀夫の進言に従って高等女学校設立を選択している。

更に、教員も華族女学校の教員、高等女子師範出身者を揃え、1909年（明治42年）に私立雙葉高等女学校として設立認可された。

認可に際し、文部省は宗教教育禁止の念書まで提出させている（前掲、雙葉学園80年史 P. 176）が、高等女学校設立の方向を選択したことは、その後の雙葉学園の我が国における発展を考えると、極めて先見性のある決断であったといわねばならない。

さて、上層階級との関わりについては、白百合学園資料にも以下の記載がみられる。

同じころ（1890年）、やはり神田教会からスタートしたマリア会の経営する暁星学校が、麹町区飯田町（富士見町1丁目の現在地）に新校舎を建設したが、その時の生徒数は80名（明治23年末）、そのうち寄宿生は23名で、外国人と日本人の比率は、ほぼ半々だったという。外国人生徒の中には、外交官、教師、医師、技術者の子息が多く、日本人生徒の中には大臣や貴族院議員などの子息も少なくなかった。たぶん、当時日本にいた西欧人の家庭では、その子弟をフランス語または英語で教育してくれる学校として、男子は暁星学校へ女子は仏英学校へ入学させる家庭が多かったものと思われる。また、当時の指導者層の多くは外国留学を経験しており、そうした体験から男子の子弟を外国に送る例が見られた。女子については外国留学の代わりに女子仏英学校へ入れ、語学および西欧上流社会のマナーを学ばせたものであろう。（前掲、白百合学園百周年記念誌 P. 36-37）

上層階層との結びつきに関しては、上記2校でいささか記載のニュアンスに食い違いがみられるが、共通して学校運営に上流階級による支援の存在を認めている。

宗教教育禁止令に関しては、サン・モール会同様に、聖パウロ会も高等女学校設立の選択をしており、1898年（明治38年）高等女子仏英和学校として認可されている。

こうして明治末、漸く法制度上に則った女子教育を開始したカトリック

系女学校であるが、カトリック系学校における新しい女子教育の芽吹きとして、1908年（明治41年）同じくフランス系修道院に起源を持つ聖心会の修道女が来日し、同年4月聖心女子学院語学校を開設している。

聖心会は学校開設間もない6月に財団法人私立聖心女子学院を設立しており、法制度上の整備など極めて迅速に処理している。

女子教育の開花期にあたる時期に来日し、教育機関としての道を当初から歩み始めている聖心会はカトリック系女子教育機関第二世代の代表格といえる。

あ と が き

もともとこのテーマに関心を持ったのは、今を去ること2年程前から実施している、階層と教育、とりわけ家庭内の文化的再生産に焦点を当てたインタビュー調査を始めてからである。

調査の対象者は、経済的（父親・夫）にも、教育歴（本人）についても上層の婦人達であった。

インタビューを続けていくうちに、「学校歴の相続」とでも言えばよいが、数世代にわたり同じ学校へ進学させているケース、それも一家族のみの傾向というよりむしろ、親族・姻族という範囲を拡げた形で、同じ学校の教育体験を有している人々と遭遇することになった。

その中で、とりわけ一部のカトリック系女子教育機関に進学しているケースが多かった。

数世代にわたる教育歴であるから、こうした学校の創立時期から、すなわち近代女子教育創生期から継続して、同じ学校へ世代を超えて進学していることになる。

歴史の変遷のなかで、同じ学校といえども、様々な社会状況のなかで、幾多の変更も余儀なくされ、今尚存続しているわけであるが、創立期の様子を是非確認してみたかった。

冒頭で篠田鉦造の文章を取り上げたが、『明治百話』それに先立つ『幕末百話』は報知新聞記者であった篠田の「聞き書き」に基づいている。

私のインタビューは、一番高齢の方で明治年間生まれであるが、明治末期の生まれであるから、本稿執筆に際し、実際インタビュー調査で得た内容には立ち入らないようにした。

しかしながら、本稿で描いてきた内容は、全てインタビュー調査データの背景になる歴史上の情報であり、そうした事情から、多分に偏りのある構成になってしまったことをお詫び申し上げる。

更に、先人の知見を追う作業に終始し、文字通り「覚え書き」となってしまった。

それにも関わらず、執筆の機会を与えて下さった平野敏政教授、提出まで、授業で発表の機会を与えて下さり、沢山の貴重なアドバイスを下さった、川合隆男教授、有末賢教授、渡辺秀樹教授、名古屋大学の和崎春日教授、日本女子大学人間社会研究科の岩木秀夫教授、真橋美智子教授、また、数々の貴重な資料をご提供下さった諸機関の皆様方、そして本稿の構成や言葉の使い方などに、細やかな意見を下さった社会学研究科博士課程院生の和田悠氏にも心から感謝申し上げます。

御指導を十分に生かし切れていないことを肝に銘じ、今後、更に精進し研究に励む覚悟である。

資 料

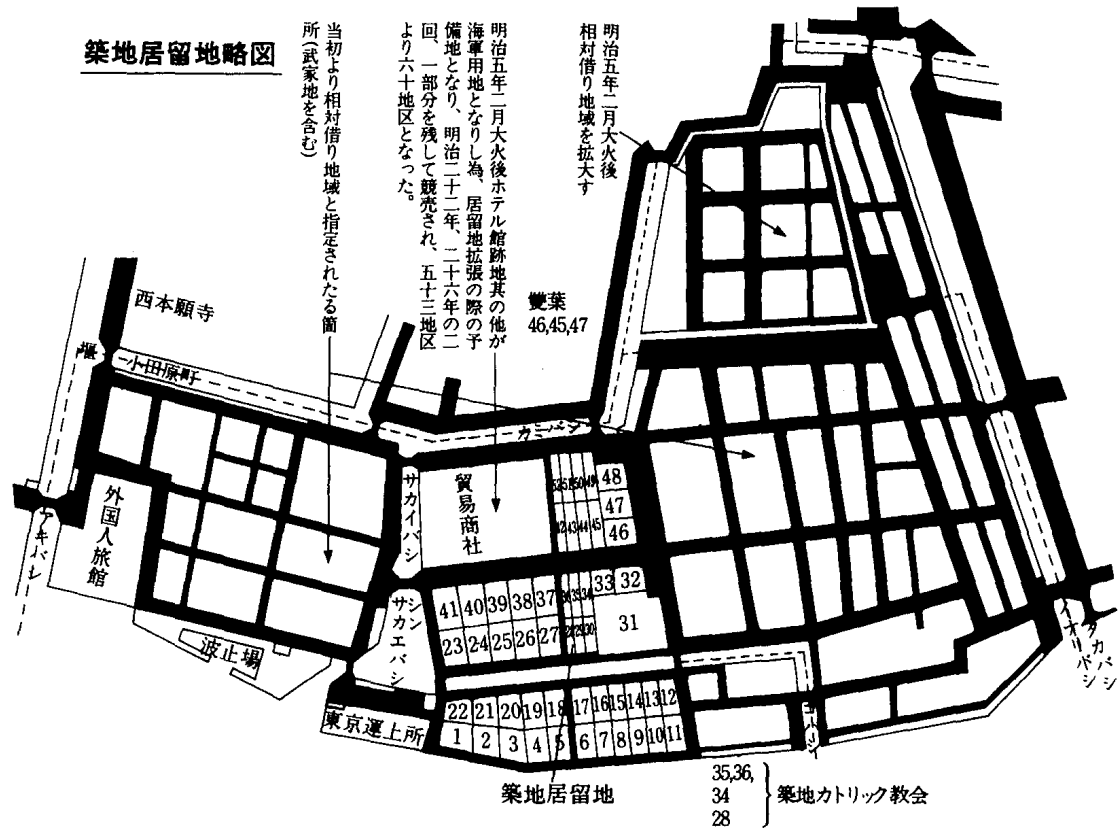


図 1) 築地居留地略図 (雙葉学園 80 年の歩みより) 1867 年 (慶応 3 年) 6 月, 築地鉄砲洲辺りを居留地として設定した。この地から近代女子教育は始まった。

<p>後援者 鍋島侯爵夫人 西郷侯爵夫人 前田侯爵夫人 戸田伯爵夫人 田中子爵夫人 香川子爵夫人 青木子爵夫人 校長 帝国大学教授 長井長義博士 幹事 野辺地理安 フランス語の部 教師 マダム・セン・ヘレン 午前の授業 火・木・土 十時—十一時 午後の授業 第一コース 火・木・土 一時—二時 第二コース 火・木・土 華族女学校の生徒が出席できるよう、その授業終了三十分後に開始。 どの授業にもフランス語・英語の話せる通訳が一人つく。</p>	
<p>英語の部 教師 マダム・セン・マリイ マダム・セン・フランシス 午前の授業 月・水・金 十時—十一時 午後の授業 第一コース 月・水・金 一時—二時 第二コース 月・水・金 華族女学校の終了三十分後に開始。どのクラスにも英語、日本語の話せる通訳が一人つく。</p>	
<p>授業料 毎月 三円 校内で行う個人授業は一時間五十銭 附言 毎週一度サロンで授業を行う。そこでは会話のほかにヨーロッパの習慣や作法を教える。 毎月一度、午後の授業をレセプションの時間とし、後援者の夫人方をお招きする。このレセプションはフランス語の部と英語の部とを隔月に行う。 休日は華族女学校の休日準じ、そのほかに校長が定める三日を休日とする。 音楽その他の授業は幹事と協議して定める。</p>	
<p>（サン・モール修道院文書）</p>	

図2) 雙葉会外国語学校学則（雙葉学園80年の歩みより）華族女学校、女子師範学校の生徒も受け入れられるよう授業時間にも工夫がみられる。

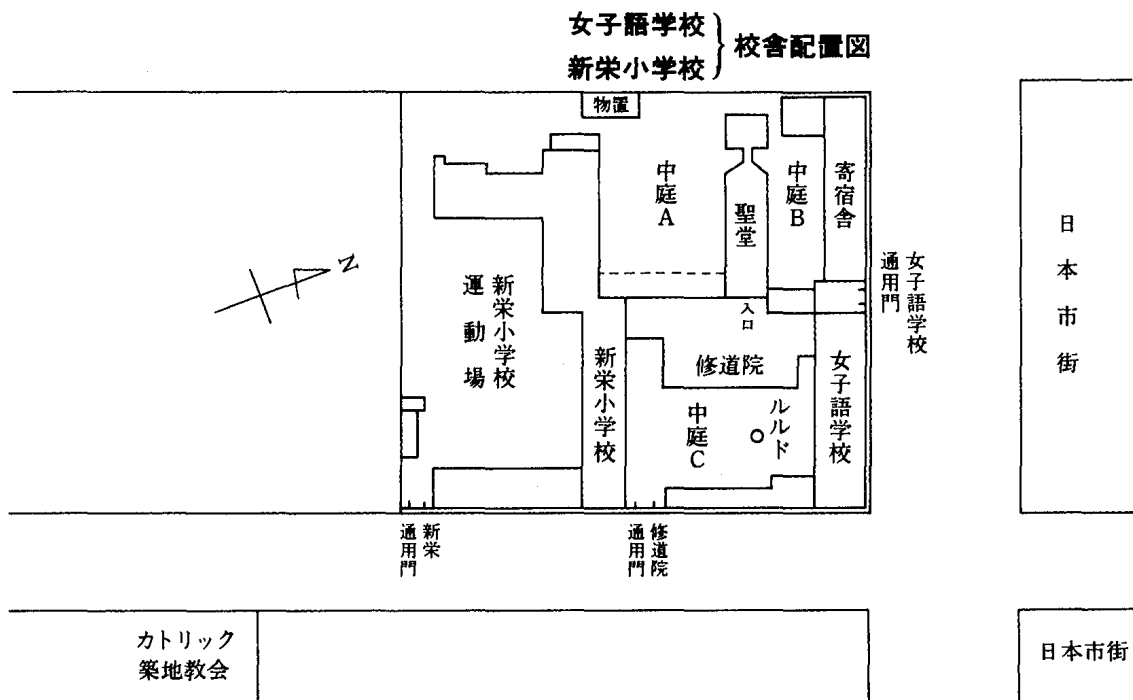


図3) 女子語学校・新栄小学校校舎配置図 (雙葉学園 80 年の歩み)

1896 年 (明治 29 年) の煉瓦づくりの新校舎は、孤児達の出入りが多い小学校とはできるだけ切り離して刷新が図られた。



図4) 創立当時の生徒 (白百合学園百周年記念誌)



図 5) 寄宿生の洋服（白百合学園百周年記念誌より）

大勢の子ども達の衣類は、スール（修道女）の手によってローブ、マント、帽子、下着まで子ども達それぞれの寸法に合わせて作られた。

材料は布地・ボタン・靴・学用品に至るまでほとんどフランス製であった。

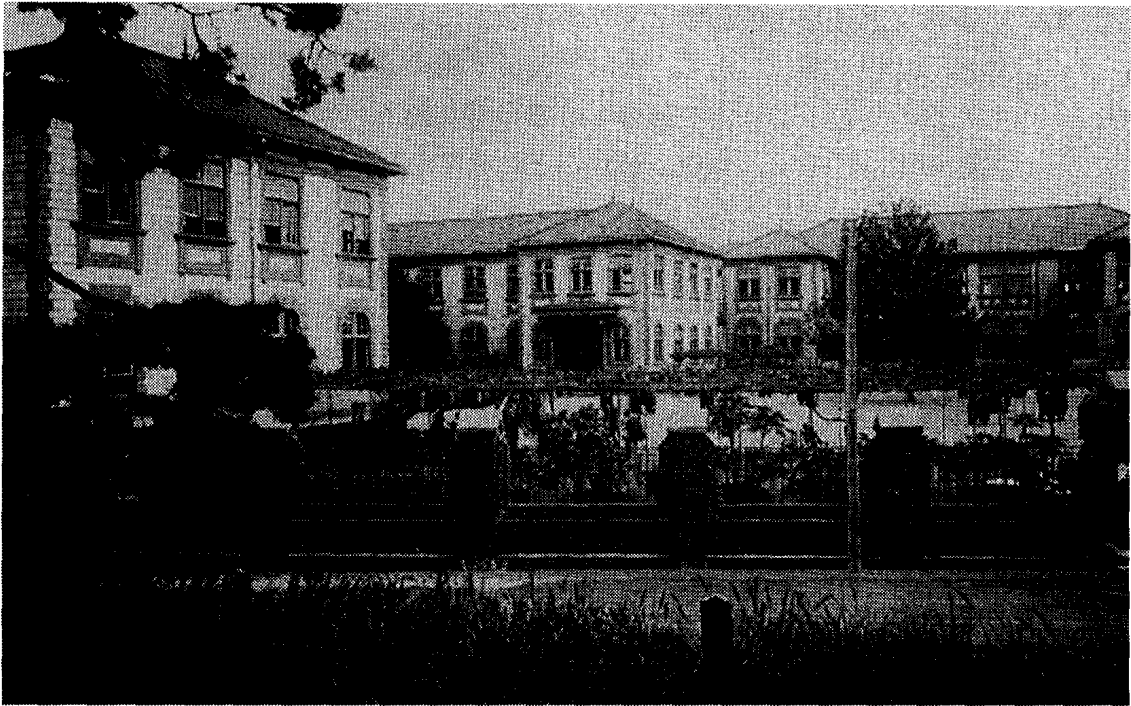


図6) ぶどう棚越しに女学校と小学校の校舎を望む
(雙葉学園 80 年の歩み)

注

(注 1) 女子教育という用語は、時代規定など明確な定義のもとで使用されていないが、初等教育は明治5年の学制頒布のときの太政官布告文にも、「自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく……略……」とされ、男女に平等の教育機会均等を謳っている。しかし、それ以降の教育においては女子の師範学校設立、高等女学校令公布など、女子の高等教育を指して考察する場が現実的であった。

(注 2) 『下田歌子先生伝』によると、桃夭女塾は、歌子が宮中務めを辞したのち、女官時代に知遇を得ていた明治新政府の中樞、すなわち、伊藤博文伯爵、山県有朋伯爵、井上毅子爵、土方久元子爵、佐々木高行子爵など、高官の女兒の教育機関として始まった。女塾は、漢詩に秀でた歌子らしく「詩経」周南桃夭篇「桃之夭夭，灼灼其華，之子于歸，宜其室家」の句に基づく、要は花嫁女塾の意。（『下田歌子先生伝』，P. 182-183）

その後、華族女学校に奉職したのち、実践女学校を設立し、婦人大衆の教化と救済に務める。（同，P. 358, 366）

(注 3) 隅谷は『近代日本の形成とキリスト教』において当時の知識階級を士族に他ならないとし、しかも、彼らは薩長土肥の連合藩閥政権＝天皇を中心とした絶対王政下では志を伸ばしうる余地が無く、他日に備えるため、西洋文化の中心地横浜、東京、神戸などに来て英語を学び、西洋文化を摂取しようとしたのであるが、ここで図らずも、キリスト教の教説に捉えられたのである、と説明している。(『近代日本の形成とキリスト教』P.16)

(注 4) 『ドクトル・ヘボン』によると、日米通商修好条約における宗教上に関する規定は第 8 条であるが、交渉役ハリスが聖公会員であったことから、この第 8 条はハリスの遠謀深慮によるものと理解されている。

このように開港と同時に英學の研究は燎原の火の如く開港場から流行し始め、英學を通じてキリスト教は自ら我國民の中に浸透して行ったとある。(『ドクトル・ヘボン』P.103)

(注 5) アメリカン・ミッション・ホームは Mrs. プラインにより始められた学校であるが、教育機関の設置と混血児問題の解決に尽力し、生徒募集の公告を中村正直が書いたこと(横浜史編纂所に保存)でも有名である。

現在の共立学園である。(『ドクトル・ヘボン』P.326-332)

(注 6) 萩原延寿『岩倉使節団 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』によると、当初条約改正にあたり、「自国のキリスト教信者に保護をあたえることや、かれらを悲惨な迫害から解放することは断固として拒否した」(P.234)使節団も、英国にてカンタベリー大僧正の訪問、福音同盟など相次ぐキリスト教関係組織の訪問を宿舎に受け、日本におけるキリスト教禁制、迫害に対する非難を受けている。

これに対し、岩倉も「この機会を利用して、貴殿が言及している日本のキリスト教徒迫害について、一言せざるをえない。……略……」と弁明しているが、高札が廃止されたのは、岩倉のこの発言から 2 か月後の 1873 年(明治 6 年)2 月のことである。(P.274-275)

(注 7) 『信仰と教育と』によると、オズーフ司教はサン・モール修道会総長にあて、明治 19 年以下の手紙を送っている事が記されている。

もう何年も前からですが、私は築地の孤児院と学校のほかにもう一つの学校を創めたいものと願っておりました。その学校はかなりよい階層の日本人がその子どもたちを入学させるのに異論のないような学校です。既に設立されている学校は、貧しい者だけのものであり、貧しい人々のものだけだという評判をもっています。今日、よい階層の若い女性たちのための学校をつくる必要があることは、痛切に感じられます。(P.74)

この文面から、司教座自体が、カトリック修道会の方向転換を示唆して

いることが伺える。また、

私たちの目の前にはプロテスタントの学校がいくつもあり、既にしっかりした学校になっていて、日一日そこに入学する女性の数はふえています。その女性たち皆、将来、高い階層の妻になる人たちです。

と述べ、当時のプロテスタント系女学校の隆盛を認めつつ、修道会に方向の転換を提案している。更に、

……略……少なくとも一つのカトリック学校を東京につくり、相当な身分の家庭の前にさし出すことは、必要であるばかりでなく、焦眉の問題です。その学校で、若い女性たちは、両親の望むような教育を受け、異端に毒されることなく、真理の教えを見出し、彼女たちが求めてきた人間的知識だけでなく、信仰の光も受けるでしょう……略 (P. 74)

この頃の代牧司教の焦りが如実に吐露されており、プロテスタント側が自らを「耶蘇」と呼び、カトリックと区別したように、カトリック側も、プロテスタント側を「異端」と表現し、敵対心が少なからず表れていることは「教理」を考えると興味深い。

参考・引用文献

- 安部磯雄, S 57『近代婦人問題名著選集第三巻 婦人の理想』日本図書センター
 稲垣良典, 1971『現代カトリシズムの思想』岩波書店
 ベーコン, アリス, 2003『明治日本の女たち』みすず書房
 江上・山本・林・成瀬編, 1997『詳説世界史』山川出版社
 海老沢有道, S 43『維新変革期とキリスト教』新生社
 深谷昌志, S 56『増補良妻賢母主義の教育』黎明書房
 福沢諭吉, 2003『福沢諭吉著作集第 10 巻』慶応義塾大学出版会株式会社
 福沢諭吉, S 45『福沢諭吉全集第 11 巻』岩波書店
 雙葉学園 80 年の歩み編集委員会, 1989『雙葉学園 80 年の歩み』
 五野井隆史, 2001『日本キリスト教史』吉川弘文館
 萩原延寿, 2002『岩倉使節団 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』朝日新聞社
 女子学院史編纂委員会, 大濱徹也, 1985『女子学院の歴史』
 女子学院資料室委員会, 2002『目で見る女子学院の歴史』
 亀井・三上・林編, 2001『標準世界史年表』吉川弘文館
 カトリック女子教育研究所, H 15『カトリック女子教育関連歴史年表 1865-2000』
 故下田歌子先生伝記編纂所, 1989『下田歌子先生伝』大空社

- 片山清一, S 59『近代日本の女子教育』建帛社
- キリスト教歴史大事典編集委員会, 1988『キリスト教歴史大事典』教文館
- 小山静子, 1991『良妻賢母という規範』勁草書房
- 小山静子, 2002『子どもたちの近代』吉川弘文館
- 明治学院大学学長室広報, 2000『明治学院と各地の名所旧跡』
- 三上卓治, 不明『ヘボンさんてどんな人?』
- 三浦綾子, 1999『われ弱ければ 矢嶋楯子伝』小学館
- 中川清, 2001『明治東京下層生活誌』岩波書店
- 日本女子大学女子教育研究所編, 1967『明治の女子教育』
- 日本近代教育史事典編集委員会, 1971『日本近代教育史事典』平凡社
- 人間文化研究会, 1984『女性と文化 III 家・家族・家庭』JCA 出版
- 篠田鉦造, 2001『幕末百話』岩波書店
- 篠田鉦造, 2003『明治百話上下巻』岩波書店
- 新富祐子, 2000『女子師範学校の全容』家政教育社
- 杉井六郎, S 59『明治期キリスト教の研究』同朋社出版
- お茶の水女子大学刊行委員会, S 59『お茶の水女子大学百年史』
- 小河織衣, H 2『メー・マチルド』有隣新書
- 小河織衣, H 7『女子学生事始』丸善ブックス
- 大門, 安田, 天野編, 2003『近代社会を生きる』吉川弘文館
- 笹山・義江他編, 1992『日本史総合図録』山川出版社
- 佐藤健二, 2001『歴史社会学の作法』岩波書店
- 下田歌子, 1995『叢書女性論 7 良妻と賢母』大空社
- 聖心女子学院, S 33『聖心女子学院創立 50 年史』
- 白百合学園百周年記念誌編集委員会, S 57『白百合学園創立百周年記念誌』
- シャルトル聖パウロ修道女会日本管区, S 34『光は大洋を越えて』
- 渋川久子・島田恒子共著, S 56『信仰と教育とサン・モール修道会百年の歩み』評論社
- 下川耿史, 2002『明治大正家庭史年表 1868-1925』河出書房新社
- 隅谷三喜夫, 1993『近代代日本の形成とキリスト教』新教出版
- 高橋勝介, 1989『跡見花蹊女子傳』中央公論事業出版
- 高谷道雄, 1989『ドクトル・ヘボン』大空社
- 寺崎昌男・編集委員会共編, H 5『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規
- 戸沢行夫, 1999『江戸がのぞいた〈西洋〉』教育出版
- 都市紀要 4, H 3『築地居留地』

- 都史紀要 9, H 4『東京の女子教育』東京都公文書館
都史紀要 14, H 4『東京の幼稚園』東京都公文書館
都史紀要 17, H 4『東京の各種学校』東京都公文書館
都史紀要 18, H 3『東京の女子大学』東京都公文書館
都史紀要 19, H 4『東京の初等教育』東京都公文書館
山辺美津香, 「日本カトリック布教史と出版活動—幕末から昭和まで—」『カトリコス NO. 12』南山大学
山口美代子編集, 1989『資料明治啓蒙期の婦人問題論争の周辺』ドメス出版
山本武夫, 1982『新研究日本史』旺文社
山川菊栄, 2001『おんな二代の記』平凡社
山室・中野目校注, 1999『明六雑誌』岩波書店
上野千鶴子他編, 1998『日本女性人名辞典』日本図書センター
横浜雙葉学園 80 周年記念誌編集委員会, S 55『80 周年記念誌』
横浜雙葉学園 100 周年記念誌委員会, H 12『ニコラ・バレのこどもたち』
横浜共立学園編集委員会, 1991『横浜共立学園 120 年の歩み』
横浜共立学園編集委員会, 1999『横浜共立学園の 120 年』
全国歴史教育研究協議会, 1992『日本史用語集』山川出版社